

「特集 日本の新生代地史とテクトニクス」の編集にあたって

地殻とマンツルのダイナミクスを理解しようとする試みは地球科学の大きな課題のひとつである。1970年代の初頭に体系化を果たした古典的プレートテクトニクスはこの課題に対して一応の解釈を与えた。しかし、その後、議論がより細部に及び、より具体性を帯びるにつれて、単純なプレートテクトニクスの枠組みの中では解決できない問題点が多々指摘されている。なかでも、Basin and Rangeや日本海のような背弧海盆などについては、いまや剛体プレートの運動のみでその成因を解釈できないことが明らかにされている。

このような状況の中、日本及びその周辺海域は、島弧及び縁海の形成を考える上で重要な地域として改めて注目されている。とりわけ、日本は地質学、地球物理学など地球科学の諸分野の詳しいデータが蓄積されつつある場所として、様々な角度からのアプローチが可能な点で、今後の研究の展開が期待されている。地質学に携わるものとしてこのような期待に答えるためには、地球物理学など関連諸分野の研究成果を視野に収めつつ、より精度の高い地質調査と観察、そしてそれらを通して得られたデータの解析と総合という一見地味な研究を絶え間なく継続することが今後とも必要であろう。なかでも、新生代に日本列島が成立したことを考えれば、日本の新生界の研究は今後ますます重要になると予想される。

折しも地質調査所では、現在、100万分の1日本地質図第3版を編纂中であり、1992年度に日本で開催される第29回万国地質学会に向けてこれを出版する予定である。編纂に際しては、編纂の基本となる最新の地質学的資料に基づいて日本の新生界の対比と地史が検討され、その成果の一部は地質調査所報告第274号「日本の新生界層序と地史」(鹿野ほか編、1991)として既に公表されている。また、時を同じくして、第207回地質調査所研究発表会においては日本の新生代地史とテクトニクスに関する議論が展開された。本特集号「日本の新生代地史とテクトニクス」は、この研究発表会で行われた講演のうち、既に論文として公表されたものを除く7つの講演に、新たに書き下ろされた論文1編を加え、日本及びその周辺海域の新生代テクトニクスに資することを願って編集されたものである。資料の不足や著者による興味のあり方の違いもあって、対象とした地域や内容には片寄りがあるけれども、それぞれの論文が、上述の議論に際し、いささかでも関係者の関心をひき、検討されることになれば幸いである。

編集者：鹿野和彦・柳沢幸夫・吉田史郎・加藤碩一